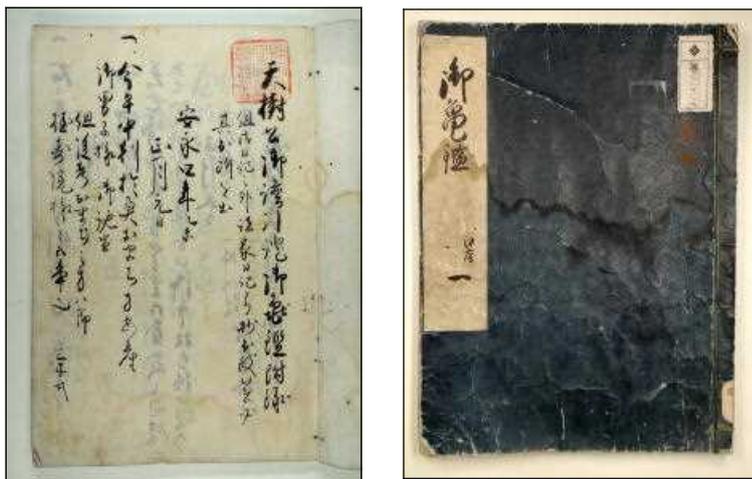


古文書倶楽部

「御亀鑑」の正体と謎

当館所蔵の「御亀鑑」一一五冊が佐竹義和家譜の引証本であることは、当館研究紀要創刊号の伊藤勝美論文が明らかにしています。伊藤論文で未発表の拙論が引用されていますので、愚見を述べてみましょう。



御亀鑑 江府一 (AS289-18-1) 表紙 (右) と冒頭 (左)

【発行】

秋田県公文書館
2014.5
第 59 号

六月二日 (月) から八日 (日) まで、特別整理期間のため休館となります。ご不便をおかけし、申し訳ありません。九日 (月) からは通常どおり開館いたします。

たまたま「御亀鑑」の刊本第六巻の校正に關わる機会がありました。どんな史料だろうと解題を読みましたが、「国典類抄」の続編という説明は誤りであることがわかりました。なぜなら「御亀鑑」は、部類記ではありません。ここから「国典類抄」とは編纂目的が異なると考えられ、同列に扱えないことが明白なのです。そこで、「御亀鑑」の正体を探ろうと思ひ、第一冊目、すなわち江府一の冒頭を見ました。すると、

天樹公御譜引証御亀鑑附録

但御日記之外、諸家日記より抄出致候者、必其出所を出、

とあります。右から編纂の目的や方針がはつきりしました。次の課題はいつ成立したかになります。佐竹文庫で「御亀鑑」の次に配架されているのが、義和家譜と「御亀鑑」一一五冊が上程された史料です。関係する史料などは伊藤論文が詳しいので、そちらを参照してください。というわけで簡単にわかってしまったので、「発見」したというほどではありません。ですから二〇年近く前に書いたことを今更紹介するのもいかがと思うのですが、消滅するのも忍びないので、あえてとりあげました。右に引用した部分は、刊本第一巻には見えませんが、そう思って二〇年近くが経ってしまいました。

【鈴木 満】

公文書館講座のご案内

秋田県公文書館では、所蔵資料・収集資料を活用した講座を開催します。今年度は、古文書を初めて読む方向けの「古文書解読講座Ⅰ」(全6回)、古文書解読を通して秋田の地域史を学ぶ「古文書解読講座Ⅱ」(4回)、秋田県生涯学習センターと共催の「アーカイブズ講座」(4回)の三本立てです。館内のポスターやチラシ、当館ホームページに掲載してありますのでご覧ください。お申込みはFAXやメールでもお受けしております。ご不明な点は当館までお気軽にお問合せください。

TEL 〇一八 (八六六) 八三〇一

平成26年度公文書館講座

- 古文書解読講座Ⅰ
6 / 28、7 / 5・12・19・26
8 / 2
 - 古文書解読講座Ⅱ
9 / 5・12・19・26
 - アーカイブズ講座
10 / 17・24・31、11 / 7
- 会場 公文書館多目的ホール
生涯学習センター

古文書こぼればなし
**鎖国下の海外貿易を支えた
 北東北の銅山**

今日、幕藩制社会と総称される近世日本の対外政策は鎖国といわれるように、キリスト教の禁止などの厳しい思想統制が行われた一方で、海外貿易も幕府の統制下におかれ、外国船の寄港地はわずか長崎一港、相手国は清（中国）とオランダに限定されました。

ここでは、そうした鎖国下にあつて、日本の海外貿易を支えた北東北の銅山の話を一言。
鎖国下の海外貿易における鉱産物

海外貿易で問題なのは、それが果たして国益にかなうのかということですが、初期の段階では金銀の流出が増え続け、新井白石によって金銀流出防止策として海船互市新例が施行されました。しかし、消極策で収益を得ることは無理であるとする発想からこれを一八〇度転回し、国益を損なわない輸出品の創出を行ってそれを大量に輸出し、逆に海外から金銀の流入を図る。これを推進したのが江戸中期の幕閣で重商主義政策を掲げた田沼意次でした。

この段階で日本側の輸出品とされた物資は銅と俵物（海産物）でした。相手国がこれを了としたのは、銅がアジアの諸地域で貨幣等の素材として活用できるなど、それなりのメリットがあつたからと思われませんが、このあたりの田沼の洞察力はさすがですね。

かくして、国内各地の鉱山算出銅は長崎御用銅として重視され長崎への廻銅が国を挙げて展開し、銅が日本の海外貿易のトップに位置する

輸出品となつてゆくのです。
**長崎貿易を支えた北東北の山々
 ～阿仁銅山と尾去沢銅山～**
 こうした動きの中で、長崎廻銅のほぼ中核を成したのが北東北の阿仁銅山産出銅、同じく尾去沢銅山産出銅、そして南の別子銅山産出銅で、それぞれ秋田銅・盛岡銅・伊予銅とよばれ海外貿易の主役として名を馳せました。

表は秋田藩阿仁銅山方であつた杉原行天が記録した「旧書集摺」の長崎御用銅関係史料から主要銅山の長崎廻銅と地売銅を抜き書きして筆者が作成したものです。これで見れば、例えば文政元年（一八一八）の長崎廻銅は、盛岡銅が三二・二％、秋田銅が三〇・八％で、両銅合わせて六三％に達するのです。前述のように盛岡銅は尾去沢銅山産出銅、秋田銅は阿仁銅山産出銅の呼称ですから、今日のように尾去沢を秋田に入れて考えれば、秋田県産出銅こそが近世日本海外貿易の花形輸出品と言い得ましょう。

尾去沢のある鹿角は上津野とも呼ばれ、米代川上流域の野であることが意識されており、川は物資交流の水脈として活用され、実は尾去沢銅山産出銅も明和二年（一七六五）までは米代川下しをおこなつていたのです。これが盛岡藩野辺地港へ運ばれそこから海を下る方策に変更されたのは、同年に尾去沢銅山が盛岡藩直営になつてからです。第四九号のこぼればなしで筆者は「経済秘録」をひいて文化年中の米代川舟運の第一位運搬物資は鉱産物で五一％を占めると表示していますが、してみると、明和以前にはこれに盛岡銅を加えた大量の銅が米代川を下つていたことになりましょう。
【渡部紘一】

文化12～14年・文政1年 秋田銅・盛岡銅の廻銅額と全国比

単位 斤・（ ）内は百分比

年代	全国総額			秋田銅			盛岡銅		
	長崎御用銅	地売銅	廻銅総高	長崎御用銅	地売銅	廻銅総高	長崎御用銅	地売銅	廻銅総高
文化12年 (1815)	1,672,344	804,996	2,477,340	600,000 (35.8%)	215,710 (26.7%)	815,710 (32.9%)	352,344 (21.0%)	51,000 (6.3%)	403,344 (16.2%)
文化13年 (1816)	1,763,719	1,215,905	2,979,622	700,000 (39.6%)	432,920 (35.6%)	1,132,920 (38.0%)	343,719 (19.4%)	60,075 (4.9%)	403,794 (13.6%)
文化14年 (1817)	1,802,489	1,687,804	3,490,293	600,000 (33.3%)	694,100 (41.1%)	1,294,100 (37.0%)	466,489 (25.8%)	60,075 (3.5%)	526,564 (15.1%)
文政1年 (1818)	1,946,118	1,609,529	3,555,647	600,000 (30.8%)	524,880 (32.6%)	1,124,880 (31.6%)	626,118 (32.2%)	65,250 (4%)	691,368 (19.4%)

杉原行天『旧書集摺』八冊之内三所収「国々御銅直段付」より作成